

日本語教育実習最終レポート

これから私の3年間の変容について述べていきます。

1つ目は、今まで教える側になったことがないにも関わらず、授業を受けたり教科書を読んだり、DVDで他の先生が授業している様子を見たりして、自分なりの授業の進め方を構築できるようになったことです。前期も後期も教材や教案作りは大変でしたが、大変さより楽しさとやりがいのほうが大きかったです。常に学習者が退屈しないように、アイデアを働かせて取り組みました。以前は教えることには少し興味がありましたが、責任の大きい仕事なので、自分には向いていないと思っていました。しかし、実際に教壇に立ってみて、自分が教師として教えることがしっかりイメージできるようになり、授業をすることへの抵抗感がなくなりました。

2つ目として、傾聴力とメモをする力が伸びたと感じました。以前は、人の話を聞く時と聞かない時とで差がありました。しかし、同級生の授業を見ているうちに集中力がついてきて、聞きながら質問を考えたり、気付いたことをその都度メモが取れたりできるようになりました。更に、以前は、「自分と意見が違う時は、自分の意見をしっかりとった方がいい」と思い、ストレートに自分の意見をすぐに言っていました。今は他人の考えは簡単には変えられないと考えて、相手の意見も必ず肯定するようにしています。以前より意見を言う時の物腰が柔らかくなったようで、そこは成長したと思います。メモを取るときは、キーワードだけを書いておき、後から自分の感じたことを付け足していくようにしています。日本語授業観察シートでは、カテゴリーごとにメモをとる部分が分けられていたので、メモが取りやすく部分ごとに注目することができました。

次に過去のレポートを振り返ってみて、今思うことを付け足しながら述べていきます。

1つ目は、「授業はある程度スピードがある方が、頭が回転し学生も必死について来ようとするのでうまく進むのではないか」というものです。今回の実習授業では新しく教えるというよりは復習が多く、特別にスピードを意識して授業することがありませんでした。しかし、N先生が最初に見せてくださった授業では、新しい漢字を教えたと思ったら、フラッシュカードで単語の勉強をしたり、教科書の内容をしたりしていて、時間が過ぎるのを感じさせないほどのスピードだったのを覚えています。「早く授業が終わらないかな」という雑念が湧くことなく集中力を保てていて、全く退屈しませんでした。プロの先生は50分でこんなに内容を盛り込めるのだと思いました。実際に自分がそのクラスの担当になったら、時間が過ぎて内容が終わらなかったという事態になってはならないので、N先生のようなスピード感ある授業を、私も今後できるようになりたいと思いました。

二つ目は「五感を多く使わせる授業」です。理由は、頭に何か一つでも引っかかっている状態を作れたら、記憶が定着するからです。学習の場で使えるのは「視覚」と「聴覚」ですが、嗅覚や味覚を利用して効率を上げる人もいます。授業に取り入れるに

はこれらは難しいですが、例えば、「視覚」は目への負担が大きくて疲れやすい作業なので、別の活動と挟みながら取り組むなど工夫することができます。他にも、花丸と訂正だけして返却するのではなく、コメントを付けて返したり、学習進捗状況が見えるように可視化したり、発言する機会を多く与え、全体の前で発表することで、学習者にも適度な緊張感を与えたり、授業に積極的に参加していると感じさせたりすることができると思います。YMCA では授業中にスマートフォンが触れられない仕組みになっていました。以前何かのテレビで、スマートフォンは触らなくても、目の前にあったり、ポケットに入れていたりするだけでも集中力が落ち、見えない別の部屋に置いておくことが一番効果的だということを見ました。授業の中で理解して覚えて帰れば、家での復習が楽になります。YMCA の学生の中には、お昼で授業が終わったらすぐアルバイトに行く学生もいるようでした。また翌日も朝早く授業が始まると思うと、毎日忙しいのではないかと思いました。学生にただ教えるのではなく、環境を整えることが大事だと、そして、自分なりの工夫によって授業中の時間を有効に使ってもらいたいと、強く思いました。

実習前の授業を受けていた段階では、どれも簡単そうに見えて、自分ならできると思い込んでいました。しかし、実際に教壇に立つと、意識しないと直せないことが多々ありました。それを考えながら授業を進めることが、容易ではないことを知りました。過去のレポートの中では、こう改善したらいい、自分だったらこういう工夫をする、と気付いたり、提案できていたりしました。新しいことを考える姿勢や直したらいいことに気付けるのはいいことなのですが、「言うのは容易、実行は時間がかかる」ことを知りました。

私がこれから目指すことは、きれいな日本語を使えるように、敬語の勉強などを通して日本語のブラッシュアップをすることです。3年次に受けた秘書検定では、敬語だけでなくビジネス文書の作り方や電話対応の仕方など、社内で生きる知識を得ることができました。日本人でもあやふやなこれらの対応方法は、知っているほど役に立ち、日本語教育にも生かせると思います。そして読書の時間を沢山とり相対的に日本語力を上げていき、英語力もまだまだつけていかないといけないと思います。今後は、実際にビジネスの場で使うほど日本語は身につけられると思うので、まずは一般企業に就職したいと思っています。そして本職とは別で、アルバイトとして日本語を教えられたらいいなと考えています。更にいつか、海外の日本語のクラスなどで、教える機会を得られるようになりたいと思っています。また日本語教員養成課程を受けて、教育の分野に興味を持つようになりました。教え方や自分の勉強の仕方などにも、より一層関心が湧くようになり、興味の幅が広がってよかったです。

私が日本語教師になったら、学習者の日本語学習のモチベーションを上げられるような教師になりたいと思います。なぜなら日本語の学習が難しく挫折する人が多いからです。香港の友人が、よく SNS を通して、勉強したところを見せてくれていました。平仮名とカタカナの文字学習の時点で、もう諦めかけていました。もう一人のイギリスの友人は、特に動詞の活用や助詞の使い方に苦戦しているようで、日本語は難しいとよく言っています。

このような人達を見てきて、「日本語の勉強のハードルは高い、教師は学習者にとって身近な存在でないといけない」と思いました。実際に、私も過去に苦手な科目でも先生に好感が持てると、「聞こうかな」「宿題ちゃんとしようかな」となったことがあるので、親しみをもってもらえて、学習者の学習意欲を上げられるような教師になりたいです。

振り返ると、この3年間はとても早く過ぎました。日本語教師は「なりたい」と思ったときにスタートしたいと思っています。将来、どのタイミングで始めるかはまだ不確かですが、必ずどこかで日本語を教えることに携わりたいです。横溝先生と授業外でも時々お話する機会があってとても楽しかったです。一緒に今まで授業を取ってきた同級生もみんな親しみやすい人たちで、良い環境の中3年間で過ごすことができました。今まで皆さんにお世話になりました。ありがとうございました。